

2025 度実施の学修行動と学修成果の調査アンケートの分析結果

ヒューマンケア学部看護学科

ヒューマンケア学部看護学科では、ディプロマ・ポリシー（以下 DP）を評価するために、全学年に「コミュニケーション」、「レポート記述」、「討議（カンファレンス）」、「自己管理」の項目を加え、さらに 1 年生・2 年生では「根拠となる知識・技術」3 年生では「根拠となる知識・技術」「実践力」「プロフェッショナリズム」、4 年生では「実践力」「プロフェッショナリズム」のアンケート項目を加えて調査している。

1. 授業関連

1) 【授業の予習や復習、授業課題のための勉強】

昨年度からの変更点として、昨年は「頻繁にした」「かなりした」「時々した」「あまりしなかった」「全くしなかった」の 5 段階評価であったが、今年度は「かなりした」が削除され 4 段階評価となった。

今年度の「授業の予習・復習、授業課題のための勉強」に関する調査では、1・2・4 年生では最も多い回答が「時々した」であった。一方、3 年生では「頻繁にした」が 44.2%（昨年 45.0%）と最も多く、他学年とは異なる傾向を示した。「時々した」の割合は、1 年生 67.8%（昨年 46.2%）、2 年生 59.3%（昨年 54.0%）、3 年生 47.5%（昨年 28.4%）、4 年生 53.3%（昨年 39.2%）であり、いずれの学年も昨年度より増加していた。

4 年生について昨年度と比較すると、昨年度は「頻繁にした」「かなりした」の合計が 53.8%であったが、今年度は選択肢の変更により「かなりした」が削除され、「頻繁にした」のみとなった結果、34.6%へと大きく減少した。また、「頻繁にした」「時々した」の合計も 88.1%（昨年 93%）とやや低下していた。その他の学年では、「頻繁にした」「時々した」の合計は 1 年生 91.8%（昨年 90.9%）、2 年生 76.4%（昨年 84.4%）、3 年生 91.7%（昨年 93.6%）であり、特に 2 年生の低下が顕著であった。

一方、「あまりしなかった」「全くしなかった」の割合を見ると、4 年生では昨年度の 6.1%から、今年度は「あまりしなかった」11.2%、「全くしなかった」0.9%へと増加していた。その他の学年では、1 年生 8.2%（昨年 9.1%）、2 年生 23.6%（昨年 15.3%）、3 年生 8.3%（昨年 6.4%）であり、特に 2 年生と 3 年生で増加がみられた。

これらの結果を見ると、3・4 年生では学習を「しなかった」学生の割合が昨年より増加しており、4 年生になっても学習習慣が十分に定着していない学生が一定数存在することが示唆された。必要に応じて、今後も継続的な見守りや細やかな指導が求められる。また、全体的に昨年度と比較して学習意欲の低下がみられ、3 年生では実習期に学習していた姿勢が 4 年生になると十分に維持されていない様子もうかがえた。

2) 【就職や資格取得に関わる勉強】

昨年度からの変更点として、昨年は「頻繁にした」「かなりした」「時々した」「あまりしなかった」「全くしなかった」の 5 段階評価であったが、今年度は「かなりした」が削除され 4 段階評価となった。

昨年度は上位の項目として、「頻繁にした」「かなりした」の 2 項目の選択肢があったが、

今年度は「頻繁にした」の1項目のみとなり、「かなりした」は削除されている。そのため、今年度の「頻繁にした」の割合は、1年生 15.7% (昨年 25.7%)、2年生 19.5% (昨年 19.4%)、3年生 20.8% (昨年 38.5%)、4年生 65.4% (昨年 76.2%) となり、1,3,4年生で下降していた。ただし、例年と同様に4年生では大きく上昇している点是不変。1年生は昨年より割合が低下しており、授業の予習・復習の結果と同様に、学習意欲の低下が懸念される。2年生は昨年と同様の割合であり、大きな下降はなかった。また、3年生の大幅な下降も気になる点であり、就職試験の前倒しを踏まえると、より早期から就職への意識づけが必要と考えられる。

一方、4年生は「頻繁にした」が昨年より約12%低下したものの、「時々した」と合わせると96.2%となり、一定の学習意欲は維持されていたといえる。また、4年生の資格学修に関して「あまりしなかった」3.7%、「全くしなかった」は0%で、合計3.7%と昨年の7.5%より改善していた。

これらの結果から、1年生の下降が顕著となっており、早期からの就職の情報の提供や4年生の国家試験の合格情報等、学習意欲の向上につながる指導が必要と考えられる。

3) 【わが国と世界の持続・発展に尽くす力】

本学の「目標とする力」の一つである「わが国と世界の持続・発展に尽くす力」について、肯定的評価（「十分に身に付いた」「やや身に付いた」）の割合は、1年生 81.8% (昨年 72%)、2年生 67.5% (昨年 75%)、3年生 81.7% (昨年 88%)、4年生 92.5% (昨年 89.2%) であった。一方、「あまり身に付いていない」「全く身に付いていない」は、1年生 18.2% (昨年 27.8%)、2年生 32.5% (昨年 25%)、3年生 18.3% (昨年 11.9%)、4年生 8.3% (昨年 10.7%) であった。特に2年生の低下が最も大きく、学年間の差が明確に示された。2年次は専門科目の講義が中心となるため、学びが社会や世界の発展にどのように結びつくのかを実感しにくい時期であることが、この結果に影響していると考えられる。一方で、3年生は領域実習を通して看護の社会的役割を具体的に理解し、4年生は統合実習、卒業研究、就職活動、国家試験勉強などを通して、学びを社会全体の視点から捉える力が育つと推察される。そのため、上級生では肯定的評価が高くなり、2年生との差が顕著に表れたと考えられる。

今後は、2年次の講義や基礎実習Ⅱにおいて、わが国と世界の繋がりや、看護が社会の持続的発展に寄与する具体的な行動について情報提供を行い、学びの意義を実感できるよう意識づけを図ることが望ましいと考える。

2. 授業時間以外の学修時間

【授業時間以外に行った予習や復習、授業課題のための学修時間】

学習時間を多い順にみると、1年生では「1～2時間」が最も多く43.8% (昨年 46.2%)、次いで「2～3時間」が27.3% (昨年 22.7%) であった。2年生では「1～2時間」が最も多く38.2% (昨年 37.9%) であり、昨年は次に「2～3時間」(33.1%)が多かったが、今年は「1時間未満」が22.8%と増加していた。3年生では「2～3時間」が28.3% (昨年 32.1%) で最も多く、次いで「1～2時間」が18.3% (昨年 28.4%) であった。4年生では「2～3時間」が25.4%で最も多く、次に「3～4時間」が17.8%であった。また、「5～6時間」と「1～2時間」がともに15.9%であった。4年生は国家試験前の学習時間としては「3～4時間」が最も多い割合であるものの、全体としては学習時間の幅が広く、「1時間未満」

の学生も 6.5% 存在した。4 年生では、国家試験に向けた学習時間に個人差が大きく、学習への取り組み方が学生によって異なる傾向がみられた。

昨年と比較すると、2 年生の学習意欲がここでも低下している結果となっている。近年の傾向として、学習行動が定着せず、毎日決まった時間に学習していない学生が増えている。また、シラバスにも講義前後の学習が必要と提示しているが、講義を受講した全教科において、実施しているとは言い難い。そのため、1 年生から計画的に学習へ着手できるよう、教員による指導を強化する必要がある。

3. 本学の教育内容や設備、学修支援の満足度

【授業の内容】

昨年度は「とても満足」「かなり満足」「やや満足」「やや不満」「とても不満」の 5 段階評価であったが、今年度は「かなり満足」が削除され、4 段階評価となった。

今年度の「とても満足」「やや満足」の合計は、1 年生が 90.1%（昨年 90.9%）、2 年生が 79.6%（昨年 89.5%）、3 年生が 91.7%（昨年 96.3%）、4 年生が 91.7%（昨年 90%）であり、1～3 年生では昨年度より低下がみられたものの、4 年生はわずかに上昇していた。これらの結果から、全体としては高い満足度が維持されており、教育体制が整い、学生の期待に沿った授業が展開されていたと考えられる。

一方で、「とても不満」の割合は、1 年生 0%（昨年 0.8%）、2 年生 2.4%（昨年 1.6%）、3 年生 1.7%（昨年 0.9%）、4 年生 0%（昨年 0%）であった。1・4 年生では不満がみられなかったものの、2・3 年生には不満を抱く学生が一定数存在し、これらの学年では学修時間の伸び悩みも確認されている。これらの状況を踏まえると、学生がより理解しやすい教授方法を工夫し、丁寧で分かりやすい授業を心掛けるとともに、今後も学年ごとの変動を継続的に観察していく必要がある。

【演習室や実習室の設備や器具】

昨年度は「とても満足」「かなり満足」「やや満足」「やや不満」「とても不満」の 5 段階評価であったが、今年度は「かなり満足」が削除され、4 段階評価となった。

「とても満足」と「やや満足」を合わせた割合は、1 年生 95%（昨年 96.2%）、2 年生 94.3%（昨年 95.1%）、3 年生 95%（昨年 97.3%）、4 年生 97.2%（昨年 97.7%）であった。いずれの学年も昨年度よりわずかに低下しているものの、すべて 90% 台を維持しており、依然として高い満足度が保たれている。このことから、本学の演習室環境の充実およびその活用状況が、学生の高い評価につながっていると考えられる。

【所属する学科のカリキュラム】

昨年度は「とても満足」「かなり満足」「やや満足」「やや不満」「とても不満」の 5 段階評価であったが、今年度は「かなり満足」が削除され、4 段階評価となった。

「とても満足」と「やや満足」を合わせた割合は、1 年生 91.7%（昨年 94%）、2 年生 83.8%（昨年 95.9%）、3 年生 92.5%（昨年 96.4%）、4 年生 91.6%（昨年 96.9%）であった。昨年度より、低下しているが 1,3,4 年は 90% を維持している。気になるのが、他学年よりも低い 2 年生の満足度である。2 年生に対しては、専門科目の学びが将来の実践や看護職としての成長にどのように繋がるのかを具体的に示し、学修意欲を高める支援が必要であると考えられる。

【授業の内容についていけない】

今年度の評価項目は、「全くない」「あまりない」「少しある」「大いにある」の4段階評価である。「少しある」「大いにある」の2評価の合計は、1年生24%、2年生17%、3年生5%、4年生3.7%であった。学年が上がるにつれてこの割合は大きく減少し、3・4年生では授業についていけないと感じる学生はごく少数であった。一方、1・2年生では比較的高い割合が見られ、学年差が顕著であった。その要因として、1・2年生は大学での学修方法がまだ十分に確立されていないことが考えられる。また、自己評価が安定しにくい時期であることや、新しい学習環境への適応が進んでいないことも影響している可能性がある。危惧されることとして、人体の構造や機能、疾病の理解等の専門基礎科目での低い評価は、専門科目への移行時に影響が生じる可能性が高く、今後のデータの変動を注視するとともに、特に1・2年生を対象とした学修支援の充実が必要と考える。

【大学全般を総合的に判断して】

昨年度は「とても満足」「かなり満足」「やや満足」「やや不満」「とても不満」の5段階評価であったが、今年度は「かなり満足」が削除され、4段階評価となった。

今年度は4段階評価へ移行した影響により、全体的に「とても満足」の割合が昨年度より低下しているものの、学年間の特徴は明確に表れていた。まず、上位2評価（「とても満足」「やや満足」）の合計を見ると、1年生は91.7%であり、とても満足が28.1%（昨年40.2%：かなり満足を含む）、やや満足が63.6%であった。2年生は82.9%で、とても満足18.7%（昨年41.2%）、やや満足64.2%となり、4学年の中で最も低い結果であった。3年生は95.0%（とても満足19.2%、やや満足75.8%）、4年生は96.2%（とても満足35.5%、やや満足60.7%）であり、いずれも高い満足度を示した。

一方、不満足度（「やや不満」「とても不満」）に着目すると、全学年で昨年度より減少しているものの、ここでも2年生の数値が突出していた。1年生はやや不満のみで8.3%（昨年9.1%）、2年生は17.0%（昨年9.7%）、3年生は5.0%（昨年4.6%）、4年生はやや不満のみで3.7%（昨年5.4%）であった。特に2年生は、不満足度が他学年の2～4倍に達しており、満足度の低さと不満足度の高さが同時に確認された。

以上の結果から、今年度の評価方法の変更による影響を考慮しても、2年生の満足度の低さは顕著であり、学習環境や授業内容に対する受け止め方に特徴的な課題が存在する可能性が高いと考えられる。授業内容の難易度、学習負担の増加、授業方法との相性、あるいは学年特有の課題が影響している可能性があるため、今後は自由記述や追加調査を通して、学生がどのような点に不満や負担を感じているのかをより具体的に把握する必要がある。

【デジタルツールに関する回答】

今年度の調査では、4学年合計の結果では、74.7%の学生が生成AIを「頻繁に使用している」「時々使用している」と回答しており、生成AIが学生の学習活動に広く浸透していることが明らかとなった。利用用途としては「情報の収集」が51.4%と最も高く、検索エンジンに代わる新しい情報取得手段として生成AIを活用する傾向が強まっていると考えられる。また、「授業課題やレポートの作成」「データ分析」「就職活動」「語学学修」など、学修・キャリア形成の多様な場面で利用が広がっている点も特徴的である。一方で、「その他」が18.3%と比較的高い割合を占めていることから、授業外の個人的な疑

問の解決や日常的な文章作成など、学習以外の用途にも生成 AI が浸透している可能性が示唆される。さらに、生成 AI が提示した内容の正確性については 89.6% の学生が正しい情報か確認していると回答しており、AI の限界を理解しつつ慎重に活用している姿勢がうかがえる。この点は、適切に検証しながら利用する態度が学生の間で一定程度定着していると評価できるのではないかと考える。また、生成 AI の活用が将来に必要なスキルであると考えた学生が 89.4% に達していることから、学生自身が AI 活用を社会的必須能力として認識していると考えられる。

また、本学では、学生の主体的な学びを支援し、学修成果やスキルを可視化する取り組みとしてオープンバッジを発行しているが、今回の調査では、オープンバッジを「知らない」と回答した学生が 86.4% に達していた。制度自体が学生に十分認知されていない現状が明らかとなった。また、就職活動への活用意向についても、「そう思わない」および「オープンバッジを知らない」が 91.3% を占めており、学生の多くがオープンバッジをキャリア形成に結びつくツールとして認識していないことが示された。学生が生成 AI の活用を将来に必要なスキルと捉えている一方で、オープンバッジへの関心が低い背景には、情報提供の不足だけでなく、具体的にどのような場面で役立つのかをイメージできていないことが考えられる。今後は、オープンバッジの意義や活用方法を授業やガイダンス、キャリア支援の場面で体系的に周知し、看護学科の学生にとってどのような活用が可能かを検討していく必要がある。

4. 各学年に共通する能力の修得

ここでは、5 段階評価であり、「十分当てはまる」「かなり当てはまる」「少し当てはまる」「あまり当てはまらない」「全く当てはまらない/該当しない」である。

①コミュニケーション能力

1 年生の【日本語や英語を用いて、口述や記述により効果的なコミュニケーションを行えるようになった】では、「十分当てはまる」「かなり当てはまる」が 45.4%（昨年 31.8%）、「少し当てはまる」が 45.5%（昨年 56.1%）であった。昨年度と比較して高評価の割合が増加しており、1 年生においてコミュニケーション能力の向上が認められる。2～4 年生の設問【人間関係形成におけるコミュニケーションの重要性を理解できるようになった】では、「十分当てはまる」「かなり当てはまる」を合わせた割合は、2 年生 82.1%（昨年 66.1%）、3 年生 84.2%（昨年 84.4%）、4 年生 94.4%（昨年 81.5%）であった。特に 4 年生では高い自己評価が維持されており、学年の進行に伴いコミュニケーションに関する理解が定着していると考えられる。さらに、4 年生では実習を通して対象者とのコミュニケーション経験を積んでいることから、実践的なコミュニケーション能力も身につけていると推察される。以上より、全学年を通してコミュニケーション能力は総じて向上傾向にあると考えられる。

②レポートの作成

1 年生については、レポートに関する設問は設けていない。

2・3・4 年生の「文章の構成を考えながらレポートを作成することができるようになった」に対し、「十分当てはまる」「かなり当てはまる」と回答した割合は、2 年生 68.3%

(昨年度 57.3%)、3 年生 70.0% (昨年度 53.3%)、4 年生 81.3% (昨年度 78.5%) であった。一方、「あまり当てはまらない」「全く当てはまらない」と回答した割合は、2 年生 2.4% (昨年度 5.6%)、3 年生 0% (昨年度 4.6%)、4 年生 0% (昨年度 1.5%) であり、2 年生においてのみ、レポート作成能力が十分に身につけていない学生が一部見受けられた。レポート作成能力は、コミュニケーション能力と同様に、経験を重ねることで向上すると考えられる。しかし、自己評価が実際の能力と一致しない場合もあるため、通年を通じた継続的な確認が必要である。

③ 討議 (カンファレンス)

1 年生の【他者を思いやり権利を守りながら、自分の思いや考えを伝えるアサーティブな姿勢が身についてきた】では、「十分当てはまる」「かなり当てはまる」と回答した学生は 68.6% であり、昨年度の 62.1% から上昇した。また、「少し当てはまる」まで含めると 97.5% (昨年度 94.7%) に達し、ほぼ全ての学生が一定の成長を実感していることが示された。2～4 年生の【他人の意見を聞き、自分の意見をまとめて発言する姿勢が身についてきた】については、学年ごとに特徴がみられた。2 年生では「十分当てはまる」「かなり当てはまる」が 66.6% (昨年度 54.0%) であり、「少し当てはまる」は 41.9% であった。3 年生では「十分当てはまる」「かなり当てはまる」が 74.1% (昨年度 73.4%)、「少し当てはまる」が 24.2% (昨年度 31.7%) であった。4 年生では「十分当てはまる」「かなり当てはまる」が 86.9% (昨年度 78.5%)、「少し当てはまる」が 13.1% (昨年度 19.2%) となり、上級学年ほど肯定的な回答が増加する傾向が確認された。特に 3・4 年生において高い伸びがみられたことから、1 年次より継続してカンファレンスを実施し、段階的に学習経験を積み重ねてきた成果が表れていると考えられる。また、いずれの学年においても「少し当てはまる」以上の回答が 95% を超えており、カンファレンスを通じた学びが全学年で着実に深化していることが示唆された。

④ 学習方法の獲得

1 年生の【主体的・客観的・創造的に取り組む姿勢】については、「十分当てはまる」「かなり当てはまる」が 67% (昨年 55.3%) と大きく上昇し、「少し当てはまる」は 30.6% (昨年 40.2%) と減少した。入学直後の段階であっても、学修への取り組み姿勢が昨年度より向上しており、早期から主体的学習態度が育ちつつあることが示唆される。2～4 年生の【自身の学習方法を獲得できた】では、いずれの学年も「十分当てはまる」「かなり当てはまる」が昨年度より増加しており、特に 4 年生では 82.2% (昨年 72.3%) と高い水準に達していた。学年が上がるにつれて肯定的評価が増加していることから、学習経験の蓄積に伴い、学習方法の確立が進んでいると考えられる。一方で、2 年生は「十分当てはまる」「かなり当てはまる」が 54.5% と、他学年と比較して低い傾向がみられた。昨年度からの改善はみられるものの、依然として学習方法の定着が十分とはいえない。2 年生は基礎から応用へと学習内容が移行する時期であり、学習負担の増加や学習スタイルの再構築が求められる学年であることが影響している可能性がある。

以上の結果から、今年度の学生は総じて学習方法を獲得しつつあると評価できるが、特に 2 年生においては学習方法の確立を支援するための指導が引き続き必要である。具体的

には、低学年段階での学習方法指導の強化、学習の振り返り機会の充実、個別の学習課題に応じたサポート体制の検討が求められる。

5. 各学年で修得すべき能力

1) 1 年生

1 年生の学習内容において、「あまり当てはまらない」「全く当てはまらない」の割合が比較的高かった項目は、【チームの中で、自己の役割を果たすためのリーダーシップやメンバーシップを発揮できるようになった】であり、12.4%（昨年 17.4%）であった。講義内ではグループワークを実施しているものの、一部の学生は役割遂行がまだ十分に定着していないと感じていることがうかがえる。リーダーシップやメンバーシップは、複数回の経験を通して徐々に身につくものであり、継続的な実践機会の提供が有効と考えられる。次に、「あまり当てはまらない」「全く当てはまらない」の割合が高かった項目は、【日本語や英語を用いて、口述や記述により効果的なコミュニケーションを行えるようになった】で、9.1%（昨年 12.1%）であった。言語運用能力や表現力は、発表やレポート作成などの反復的な実践を通して向上するため、今後も意図的に発信の機会を設ける必要がある。

さらに、【常に自己省察を行い、困難な状況にあっても柔軟で粘り強く対応しようとする姿勢が身についてきた】では 4.2%（昨年 7.6%）であり、他項目と比較すると低いものの、一定数の学生が自己省察や困難への対応に自信を持ちきれていないことが示された。自己省察は学修の振り返りやポートフォリオの活用を通して育成されるため、継続的な支援が求められる。

2) 2 年生

2 年生の学習内容において、「あまり当てはまらない」「全く当てはまらない」の割合が最も高かった項目は【自身の健康管理ができるようになった】で 9.7%(昨年 7.3%)であり、新たに注目された項目である。次に高かったのは【自身の学習方法を獲得できた】で 5.7%（昨年 9.7%）であり、昨年度より改善がみられた。続いて割合が高かった項目は、【読みの読みやすさを考えてレポートを書くことができるようになった】で 4.9%(昨年 8.8%)、【討議を効果的かつ効率よく進めるための役割ができるようになってきた】で 4.1%（昨年 7.2%）であり、いずれも昨年度より低下していた。また、1 年生と同様に「少し当てはまる」の回答が多い項目もみられた。学習方法がまだ確立されていない学生も一定数存在するため、必要に応じて教員による個別の指導が求められる。討議に関しては、2 年生では座学中心の学習が多いが、3 年生では臨地実習を通してグループワークが増えることから、今後の改善が期待される。

3) 3 年生

3 年生の学習内容において、「あまり当てはまらない」「全く当てはまらない」の割合が最も高かった項目は【研究を通して、分析的・批判的に考える姿勢が身についてきた】で 9.6%（昨年 9.1%）であった。卒業研究に関連するクリティークに対して苦手意識を持つ学生が多いことを示しているが、昨年度よりわずかに改善がみられる。2 番目に高かったのは【研究倫理を理解できるようになった】で 5.8%(昨年 4.6%)であり、昨年度は上位に

挙がっていなかった項目である。3 番目は【自身の健康管理ができるようになった】で 5.0%(昨年 2.7%)と、新たに上位に挙がった項目であった。続いて【自身の学習方法を獲得できた】が 4.2%(昨年 4.6%)であった。

3 年生では臨地実習が始まり、体調管理に関する項目が上位に挙がっていることから、実習による身体的・精神的負担が影響している可能性がある。また、例年、卒業研究に関しては学生が負担感を抱きやすいため、今後も変動を継続的に観察していく必要がある。さらに、【興味・関心が持てる看護分野を見つけることができた】では低い傾向がみられ、学生が看護の面白さや自身の看護観に基づく達成感を得られるような指導の工夫が求められる。

4) 4 年生

4 年生の学習内容において、「あまり当てはまらない」「全く当てはまらない」の割合が最も高かった項目は【看護研究の意義を理解できるようになった】で 4.7%(昨年 1.6%)であった。次いで【研究を通して、分析的・批判的に考える姿勢が身についてきた】が 2.8%(昨年 1.5%)であった。3 番目は【研究倫理を理解できるようになった】(昨年 1.5%)および【臨地実習を通して、多職種と協働・連携する重要性を理解できるようになった】(昨年 0.8%)がともに 1.9%であった。また、【討議を効果的かつ効率よく進めるための役割ができるようになった】(昨年 0.8%)、【実習経験録にある看護技術について、自身の看護技術水準と卒業時の達成度の差を認識し、それを補うための努力ができた】(昨年 0.8%)はいずれも 0.9%であった。これらの項目は、いずれも昨年度の上位項目ではなかった。

一方で、コミュニケーション、看護倫理・医療安全、レポート作成、グループワーク、臨地実習に関する内容、基礎的知識の定着、研究関連、専門職としての生涯学習、看護職者の責務、看護者としての貢献に関する項目は、「十分当てはまる」「かなり当てはまる」「少し当てはまる」で 100%を示していた。グループワークに関する能力は臨地実習を通して全体的に向上しているが、その中でも自信を持ちきれない学生もあり、必要に応じて教員の積極的な介入が求められる。

全体として昨年度と比較して高評価であり、4 年間の学習の積み重ねの成果が表れている。本学が重視するプロフェッショナリズムが身についた結果として評価できる。すべての項目で 100%を達成することは困難であるが、教員の支援により評価をさらに高めていくことが可能であり、今後も指導の充実が必要である。

2025年度 ヒューマンケア学部 柔道整復学科

学修行動と学修成果の調査アンケートの解析

1. はじめに

柔道整復学科は学科のディプロマポリシーに記載されている「柔道整復学に係る広い知識と技術を習得し、患者の健康や生活の向上に役立つ人材を育成する」を踏まえてアンケート分析項目を設定し、学修プロセスにおける変化・成長を調査した。本報告では、2025年度を含めた5年間のデータについて、予習・復習状況、進路関連、専門的な知識・技術の習得について主な項目について比較し、分析した。

2. アンケート調査について

- 1) 調査時期：2025年度 1～4 年次について UNIPA にて実施した。
- 2) 学生数は表 1 の通りである。

表 1 学生数（※2025 年 4 月時点）

年度	1年生	2年生	3年生	4年生	合計
2021	133	124	101	91	449
2022	131	129	120	105	485
2023	132	126	122	128	508
2024	120	120	116	125	481
2025	133	112	113	114	472

3. 解析結果

1) 授業関連について（設問7）（表2）

2025年度は回答選択肢が4択に再編された影響もあり、前年までの数値と単純比較はできないが、全体傾向として、予習・復習の実施状況は、過去5年間で比較して中位の水準で推移した。特に「頻繁にした」は前年よりわずかに減少し、学修習慣の定着に課題が残る結果となった。一方で「時々した」は安定しており、一定の学修意識は維持されていると考えられる。資格取得を目指す学科として、引き続き予習・復習の重要性を周知し、主体的学修を促す取り組みが必要とされる。

表 2 授業の予習や復習

年度	頻繁にした	時々した	あまりしなかった/ 全くしなかった	年度	頻繁にした/ かなりした	時々した	あまりしなかった/ 全くしなかった
2025	30.1%	54.0%	15.8%	2021	28.0%	56.5%	15.5%
*2025年度は「頻繁にした/時々した/あまりしなかった/全くしなかった」の4択のため、別表とした。				2022	26.0%	53.2%	20.9%
				2023	26.3%	52.8%	20.9%
				2024	37.4%	48.5%	14.2%

2) 授業中以外の時間について（設問8）（表3）

2025年度は回答選択肢が4択に再編された影響もあり、前年までの数値と単純比較はできないが、全体傾向として、「manaba」やインターネットを活用した自習は、前年と同程度の高い利用率を維持していた。2020年度以降に定着したオンライン学修の習慣が継続しており、学修支援ツールとしての有効性が示唆される。一方で「あまりしなかった/全くしなかった」層も一定数存在するため、学年差や利用目的の違いを踏まえた支援が必要である。今後は教材の充実と活用促進が課題となる。

表 3 「manaba」やインターネットを活用した自習

年度	頻繁にした／時々した	あまりしなかった／全くしなかった	年度	頻繁にした/かなりした/時々した	あまりしなかった/全くしなかった
2025	66.4%	33.5%	2021	62.8%	37.1%
*2025年度は「頻繁にした/時々した/あまりしなかった/全くしなかった」の4択のため、別表とした。			2022	76.6%	23.4%
			2023	76.8%	23.2%
			2024	70.5%	29.5%

3) いまの不安や悩みについて(設問37, 38)(表4, 5)

2025年度は選択肢の並び順が「全くない→大いにある」へと変更されたため、否定側の選択肢が選ばれやすくなる順序効果が生じた可能性がある。しかしその前提を踏まえても、「卒業後のやりたいことがみつからない」は例年と同程度で推移し、進路選択の難しさは依然として続いている。一方、「希望の就職先や進学先に行けるか不安」は前年よりわずかに減少し、支援体制の効果が一定程度表れていると考えられる。今後も個別面談やキャリア教育を通じて、学生が将来像をより具体化できるよう継続的な支援が求められる。

表 4 卒業後のやりたいことがみつからない

年度	大いにある/少しある	あまりない/全くない	年度	大いにある/少しある	あまりない/全くない
2025	28.1%	72.0%	2021	40.8%	59.2%
*2025年度の質問は選択肢の順番に入れ替えがあったため別表とした。			2022	41.8%	58.3%
			2023	41.0%	59.0%
			2024	36.3%	63.6%

表 5 希望の就職先や進学先に行けるか不安

年度	大いにある/少しある	あまりない/全くない	年度	大いにある/少しある	あまりない/全くない
2025	50.5%	49.4%	2021	73.8%	26.2%
*2025年度の質問は選択肢の順番に入れ替えがあったため別表とした。			2022	67.5%	31.9%
			2023	66.7%	33.3%
			2024	61.3%	38.8%

4) 専門的な知識と技能の修得について(表6, 7, 8)

全学年の柔道整復に関する基本的な知識、技術、総合力に関する結果は以下の通りであった。

①基本的な知識では、「十分ついた」「かなりついた」が高い割合を占め、基礎知識の定着が継続していることが示された。②基本的な技術でも肯定的回答が多く、実習や演習を通じた技能習得が着実に進んでいると考えられる。③総合力では総合的な能力に対する自己評価が高く、国家試験対策や臨床経験が成長実感につながっている。これらより、知識・技術・総合力の各側面で学修成果が総合的に向上していることが確認された。

①柔道整復に関する基本的な知識(設問71)

表 6 柔道整復に関する基本的な知識

年度	十分付いた	かなり付いた	少し付いた	あまり付いていない	全く付いていない
2021	6.6%	39.4%	49.0%	4.3%	0.0%
2022	6.0%	38.2%	54.5%	1.3%	0.0%
2023	8.8%	44.2%	43.6%	2.7%	0.7%
2024	15.0%	43.0%	38.5%	2.9%	0.7%
2025	26.0%	37.0%	34.5%	2.1%	0.5%

②柔道整復に関する基本的な技術（設問72）

表 7 柔道整復に関する基本的な技術

年度	十分付いた	かなり付いた	少し付いた	あまり付いていない	全く付いていない
2021	5.9%	37.4%	53.1%	3.4%	0.2%
2022	4.9%	37.8%	55.1%	1.7%	1.6%
2023	7.8%	41.5%	46.8%	3.5%	0.4%
2024	14.8%	40.5%	41.6%	2.4%	0.7%
2025	23.4%	34.7%	37.9%	3.2%	0.7%

③柔道整復師になるための総合力（設問86）

表 8 柔道整復師になるための総合力

年度	十分付いた	かなり付いた	少し付いた	あまり付いていない	全く付いていない
2021	5.0%	28.5%	60.4%	6.2%	0.0%
2022	5.2%	30.2%	57.9%	5.7%	1.1%
2023	7.0%	33.5%	53.1%	5.6%	0.8%
2024	14.3%	35.0%	44.3%	5.1%	1.3%
2025	24.4%	32.0%	40.9%	2.1%	0.7%

また2025年度における各学年の質問項目①、②、③について、回答の平均スコアは表9の通りであった。

表 9 各学年の平均スコア(2025 年度)

学年	①（基本知識）	②（基本技術）	③（総合力）	【スコア】
1年生	3.86	3.83	3.77	5：充分付いた
2年生	3.80	3.74	3.67	4：かなり付いた
3年生	3.83	3.78	3.77	3：少し付いた
4年生	3.95	3.90	3.88	2：あまり付いていない
				1：全く付いていない

2025年度の学年別スコアをみると、①基本的な知識、②基本的な技術、③総合力のいずれにおいても、4年生が最も高い値を示した。これは、国家試験対策や臨床実習、就職活動を通じて、柔道整復師としての役割意識が明確になり、学修成果を自己評価として実感しやすくなったためと考えられる。一方で、2・3年生は専門的内容が増す時期にあたり、自己評価が相対的に低くなる傾向がみられた。これは学修負担の増大や将来像の見通しが十分に持ちにくい状況が影響していると考えられる。特に2年生では③総合力が最も低値を示し、学修内容の難度上昇が自己評価に影響している可能性がある。

以上より、2025年度は学年進行に伴う成長が明確に示され、特に4年生で知識・技術・総合力が総合的に高まった。一方、中間学年では学修負担の増大が自己評価に影響すると考えられ、学年特性に応じた支援体制の強化が求められる。

以上

2025 年度 ヒューマンケア学部鍼灸学科

学修行動と学修成果の調査アンケートの解析

鍼灸学科では、全学科共通のアンケート調査内容に加えて、教育課程編成・実施の方針であるカリキュラムポリシー（CP）を参考として4年間の学生の達成度を確認し改善策を示すためのアンケート調査を行った。そこで、まず、調査アンケート項目に基づき、「授業関連について」、「1日の時間の過ごし方・時間の使い方について」、「本学の設備や教育内容・学修支援について」、「不安や悩みについて」についてまとめた。次に、CPに基づき、「コミュニケーション能力や情報活用力、社会に貢献できる基礎力の養成について」、「基礎科目から専門科目の修得状況」「鍼灸師としての社会への貢献、責任感、倫理観、自己管理能力に関して」、「知識の統合、卒業研究における専門領域内の新たな課題を発見・解決する修練」について1年生から4年生まで回答者278名を対象としてデータをまとめた。最後に、4年間の学修を行うことでの「成長の実感と満足度」について、4年生83名に焦点を絞りまとめた。各事項について、今回の調査で示された要点は以下の通りである。

1. 授業関連について

「授業の予習や復習、授業課題のための勉強」（表1）については、2025年度は前年度と比較して、「頻繁にした」と回答した割合が、4年生、学科全体、大学全体のいずれにおいても増加していた。ただし、2025年度は「かなりした」の選択肢が削除されているため、前年度に「かなりした」と回答していた層が、「頻繁にした」または「時々した」に分散した可能性がある。そのため、「頻繁にした」の増加を、単純に学修時間や学修意欲の向上として解釈するには注意が必要である。実際に、「時々した」と回答した割合も増加しており、選択肢の変更が回答傾向に影響した可能性が考えられる。

一方で、「あまりしなかった」と回答した割合も増加しており、授業外学修に積極的に取り組む学生がいる一方で、十分に組み合わせていない学生も一定数存在することが示唆された。特に4年生は最終学年であり、国家試験を控えていることから、授業外学修をより積極的に行う学生を増やすことが重要である。今回、「授業中やオフィスアワー等を利用した教員への質問や要望」について、「あまりしなかった」「全くしなかった」と回答した学生が38.6%いることから、教員への質問や相談の機会をより有効に活用できるよう促すことも、授業外学修を支援する一つの方策と考えられる。今後は、学生が授業外学修に主体的に取り組めるよう、教員への相談機会の周知や活用促進を含め、学科として引き続き検討していく必要がある。

表 1：授業の予習や復習、授業課題のための勉強（前年度との比較）

4 年	頻繁にした	かなりした	時々した	あまりしなかった	全くしなかった
2024 年	26.7%	43.3%	25.0%	3.3%	1.7%
2025 年	39.8%		49.4%	9.6%	1.2%
学科全体	頻繁にした	かなりした	時々した	あまりしなかった	全くしなかった
2024 年	16.0%	31.2%	45.0%	5.9%	1.9%
2025 年	29.9%		57.2%	12.2%	0.7%
大学全体	頻繁にした	かなりした	時々した	あまりしなかった	全くしなかった
2024 年	13.1%	24.3%	48.5%	11.4%	2.8%
2025 年	23.8%		54.1%	19.2%	2.9%

次に、「就職や資格取得に関わる勉強をした」については、例年同様、学年が上がるにつれて「あまりしなかった」「全くしなかった」と回答した割合が低下しており、進路や資格取得を意識した学修が学年進行とともに高まっていることがうかがえる。

本学科では、はり師・きゅう師の国家試験に向けた取り組みを、1 年次からセミナーや講義等を通じて継続的に行っている。また、はり師・きゅう師に加えて、「健康運動実践指導者」や「日本スポーツ協会公認アスレティックトレーナー」などの資格取得を目指し、学修に取り組む学生もいる。このような継続的な学習支援体制や多様な目標設定が、学生の学習意欲を高め、今回の結果につながっていると考えられる。

一方で、今回、4 年生においても「全くしなかった」と回答した学生が 2 名（2.4%）存在した。最終学年では、就職や国家試験など、進路に直結する学修が一層重要となるため、学修に十分取り組めていない学生を早期に把握し、必要な支援につなげていくことが求められる。今後も、学生の学習意欲を高め、就職や資格取得に向けた学修を促進できるよう、学科全体で継続的にサポートしていきたい。

「友人と一緒に勉強」、「メディアライブラリーセンター（図書館）を利用した勉強」、「学内の自習用教室等を利用した勉強」については、「頻繁にした」と回答した割合が、いずれの項目においても 2 年生で最も高かった。一方で、2024 度は 2 年生の割合がいずれの項目でも低く、2025 度の 3 年生においても同様に低い傾向がみられた。このことから、2024 度 2 年生であった学生の学修環境の活用状況や友人との協同学修の傾向が、2025 度の 3 年生においても継続している可能性が考えられる。今後は、これらの傾向が学修成果や学習意欲にどのような影響を及ぼすのかについて、引き続き注視していきたい。

2. 1日の過ごし方・時間の使い方について

「授業時間外に行った予習や復習、授業課題のための学修時間」については、最終学年である4年生で高い傾向がみられ、3時間以上と回答した学生が約5割であった(3年生25%、2年生26%、1年生25%、大学全体26%)。これは、4年生において国家試験や卒業に向けた意識が高まり、授業時間外の学修に取り組む学生が増えていることを示していると考えられる。

一方で、4年生においても3時間未満と回答した学生が約5割存在していることから、授業時間外に主体的かつ継続的に学修する習慣を、下級学年の段階から定着させていくことが重要である。今後は、早期から授業外学修の必要性を意識づけるとともに、学修計画の立て方や学修時間の確保についても支援していく必要が考えられた。

「睡眠時間」については、昨年度、6時間未満と回答した学生が約7割にのぼっていたが、今年度は約6割となり、一定の改善傾向が認められた。しかし、大学全体の約5.5割と比較すると、依然として6時間未満の学生の割合は高い状況である。睡眠不足は、日中の眠気や居眠り、疲労感に加え、情緒の不安定さ、作業効率の低下、学業成績の低下などにも影響を及ぼすことが報告されている。今後も、セミナー等における面談の機会を活用し、学生が適切な睡眠時間を確保できているかを継続的に確認するとともに、生活習慣の改善に向けた支援を行っていく必要がある。

「全履修科目を平均した場合の授業欠席回数」について、3・4年生において「5回以上」を選択した学生はいなかった。この点は良好な傾向であり、今後も継続していきたい。一方で、2年生では大学全体と比較して「5回以上」と回答した割合が高い傾向がみられた。昨年度は2・3年生において「5回以上」を選択した学生はいなかったことから、今年度の2年生における欠席状況については、今後も継続して注視していく必要がある。欠席回数の増加は、学修状況や単位修得にも影響する可能性があるため、早期の状況把握と必要に応じた声かけ・支援を行っていきたい。

「部活動やサークル活動を行った回数」と「アルバイトの回数」について、例年と同様に、部活動やサークルに所属している学生は少ない一方で、アルバイトをしている学生は多数みられた。特にアルバイトについては、週2回以上行っている学生が多いことから、学修時間の確保や授業への出席状況、生活リズムなどに支障が生じていないかを注視していく必要がある。今後も、セミナー等における面談の機会を活用し、学生の生活状況を把握していきたい。

3. 本学の設備や教育内容・学修支援について

「授業の内容」について、「とても満足」「やや満足」と回答した学生の割合は、1年生94.4%、2年生87.7%、3年生79.1%、4年生89.2%であった。また、「とても不満」と回答

した学生は、1年生および3年生ではみられなかった。

さらに、「**所属する学科・コースで学ぶことができる教育内容**」についても、「とても満足」「やや満足」と回答した学生の割合は、1年生 98.6%、2年生 93.0%、3年生 94.0%、4年生 90.4%であり、いずれの学年においても9割以上の学生が満足している結果となった。

一方で、3・4年生における「**授業の内容**」および「**所属する学科・コースで学ぶことができる教育内容**」の「とても満足」と回答した割合は、大学全体の結果を下回っていた。そのため、全体としては高い満足度が示されているものの、特に上級学年において、より高い満足度を継続的に維持・向上させるための取り組みが必要であると考えられる。

次に、「**学科・コースの教員による指導・相談**」については、「とても満足」「やや満足」と回答した学生の割合が、1年生 95.8%、2年生 93.0%、3年生 97.0%、4年生 88.0%であり、全学年において概ね高い満足度が確認された。一方で、4年生については、学科全体および大学全体と比較してやや低い値を示していた。4年生は、卒業、国家試験、就職等に関する課題や不安が高まりやすい時期であることから、個々の学生の状況を把握し、適切な指導・相談につなげることが重要である。引き続き、セミナー等における個別対応に加え、学科全体で学生支援に関する情報共有を図り、組織的な支援体制を一層充実させていく。

4. 不安や悩みについて

「**授業の内容についていけない**」について、「大いにある」「少しある」と回答した学生の割合は、1年生 29.6%、2年生 24.6%、3年生 9.0%、4年生 13.3%であり、大学全体の 24.1%と比較すると、1年生および2年生で高い値を示していた。特に1年生では、身体の構造に関する基礎的知識に加え、これまで十分に学ぶ機会の少なかった東洋医学的な考え方を理解する必要があることから、授業内容に難しさを感じる学生が一定数存在する可能性がある。一方、3年生では 9.0%と低い値を示していたが、4年生では 13.3%とやや上昇していた。これは、4年次において卒業や国家試験を見据え、これまでに学修した知識を統合的に理解し、応用する力が求められることが影響している可能性がある。今後は、低学年における基礎的知識の定着支援とともに、上級学年における知識の統合・応用を促す学修支援を継続して検討していく必要がある。

「**卒業後にやりたいことがみつからない**」について「全くない」「あまりない」と回答した学生の割合は、学科全体 75.9%、大学全体 69.1%であった。また、「**希望の就職先や進学先へ行けるか不安だ**」については、学科全体 57.9%、大学全体 47.5%、「**精神面の健康状態への不安や悩みがある**」については、学科全体 87.1%、大学全体 80.3%であり、いずれの項目においても、大学全体と比較して学科全体の方が高い割合を示していた。このことから、進路や精神面の健康状態に関する不安については、大学全体と比較して、学科全体では比較的少ない傾向にあることがうかがえる。また、大学全体において「全くない」「あまりない」と回答した割合が8割を超えている項目である「**経済的に勉強を続けることが難しい**」（学科全体 87.4%、大学全体 87.4%）、「**学内の友人関係に悩みがある**」（学科全体 87.4%、大学

全体 88.1%)、「**家族との関係に悩みがある**」(学科全体 92.8%、大学全体 92.3%)、「**身体面の健康状態への不安や悩みがある**」(学科全体 82.7%、大学全体 81.6%)については、学科全体と大学全体との間に大きな差は認められなかった。一方で、「**主な相談相手**」については、「学外の友人」および「大学の教員」と回答した学生を合わせると全体の約 3 割を占めていた。大学生活における不安や悩みは、学修状況や学生生活全般に影響を及ぼす可能性があることから、学生が必要な時に相談できる体制を十分に認識していることが重要である。今後も、セミナー等における面談の機会を活用するとともに、学科における相談・支援体制について継続的に周知し、学生が安心して相談できる環境づくりに努めていく必要がある。

5. デジタルツールについて

5-1) 生成 AI について

「頻繁に利用している」と「時々利用している」の合計は、1 年生 73.2%、2 年生 70.2%、3 年生 85.1%と高かったが、4 年生は 43.4%と低かった。生成 AI の学修への活用を重要なテーマの 1 つと考え、有効活用の方法を開発し広めていく必要がある。

5-2) オープンバッジについて

「知らない」の割合が各学年とも 80%を超えた。鍼灸学科ではオープンバッジの仕組みを取り入れておらず、その導入は今後の検討課題である。

6. 入学時からの変化

6-1) コミュニケーション能力や情報活用力、社会に貢献できる基礎力の養成

社会に貢献するための基礎力として、コミュニケーション能力や他者と協働する力は重要である。「人とコミュニケーションする力」および「他の人と協働しながら物事を進める力」について、「十分付いた」「かなり付いた」「少し付いた」と回答した学生の割合は、いずれも昨年度に続き 9 割を超えており、これらの力が一定程度身に付いていると学生自身が認識していることがうかがえる。また、「十分付いた」と回答した割合に着目すると、

「人とコミュニケーションする力」

1 年生 32.4%(昨年度 27.4%)、2 年生 36.8%(昨年度 18.1%)、3 年生 17.9%(昨年度 17.3%)、4 年生 33.7% (昨年度 31.7%)

「他の人と協働しながら物事を進める力」

1 年生 26.8%(昨年度 24.2%)、2 年生 38.6%(昨年度 19.4%)、3 年生 17.9%(昨年度 14.7%)、4 年生 33.7% (昨年度 38.3%)

であった。両項目ともに、特に 2 年生において昨年度と比較して大きな上昇がみられた。一方で、3 年生ではここ 2 年間、他学年と比較して「十分付いた」と回答した割合が低い傾向にある。この傾向が学年固有の特性によるものなのか、あるいは当該学年集団の特徴によるものなのかについては、今後も継続的に確認していく必要がある。特に、今年度の 2 年生では昨年度と比較して大きな上昇がみられたことから、この傾向が次年度の 3 年生において

どのように推移するかについて、引き続き注視していく必要がある。

情報活用や社会貢献に関わる基礎的能力としては、「幅広い知識と教養」、「文章を書く力」、「自分のキャリア」、「自分の考えをまとめて発表する力」に関する項目が該当すると考えられる。これらの項目において、「十分付いた」「かなり付いた」「少し付いた」と回答した学生の割合は、いずれも概ね 9 割を超えており、多くの学生がこれらの能力を一定程度身に付けていると認識していることがうかがえる。

また、「十分付いた」と回答した割合に着目すると、

「幅広い知識と教養」

1 年生 21.1%、2 年生 28.1%、3 年生 17.9%、4 年生 31.3%

「文章を書く力」

1 年生 11.3%、2 年生 26.3%、3 年生 6.0%、4 年生 31.3%

「自分のキャリア」

1 年生 29.6%、2 年生 33.3%、3 年生 16.4%、4 年生 38.6%

「自分の考えをまとめて発表する力」

1 年生 16.9%、2 年生 35.1%、3 年生 14.9%、4 年生 34.9%

であった。これらの項目では、いずれも 4 年生で比較的高い値を示していた。この結果は、4 年次において、授業内での課題解決、自己のキャリア形成に向けた調査や整理、発表等の機会が増えることにより、学生自身がこれらの能力の伸長を実感しやすくなっていることが一因と考えられる。一方で、3 年生ではいずれの項目においても「十分付いた」と回答した割合が相対的に低い傾向がみられたことから、学年ごとの推移を継続的に確認していく必要がある。今後は、学生が学修を通じて身に付けた知識、情報活用力、表現力、キャリア形成に関する意識を、社会的課題の理解や地域・社会への貢献にどのように結び付けていくかについて、教育活動全体を通じて検討していく必要がある。

6-2) 基礎科目から専門科目の修得状況

本学科のカリキュラムポリシーは、「鍼灸医学を修めるために必要な専門基礎科目および専門科目を、段階的かつ体系的に全学年に配置する」としている。「人体の構造（解剖学）に関する基本的知識」、「人体の機能（生理学）に関する基本的知識」、「病気（内科・外科・神経系）に関する基礎知識」、「リハビリテーションに関する知識」、「公衆衛生に関する知識」、「関係法規基礎知識」、「東洋医学に関する知識」、「鍼灸治療の主な理論に関する基礎知識」、「鍼灸治療の対象・目的・方法に関する知識」、「身体診察（理学検査、四診など）に関する基本的な知識」、「経絡経穴に関する基礎知識」について、各科目の修得状況を見ると、「十分付いた」を回答した割合いずれも 4 年生が多く（表 2）、「全く付いていない／該当しない」を回答した者は見られなかった。今後も、国家資格取得に必要な知識・技能を段階的かつ確実に修得できるよう、各学年における教育内容の接続性を意識しながら、カリキュラムの運用および学修支援体制のさらなる充実を図っていく必要がある。

表 2：学年別、各知識で「十分付いた」を回答した割合

	1 年	2 年	3 年	4 年
解剖学	22.5%	31.6%	14.9%	33.7%
生理学	18.3%	31.6%	11.9%	30.1%
内科・外科・神経系	12.7%	26.3%	9.0%	28.9%
リハビリテーション	11.3%	28.1%	10.4%	31.3%
公衆衛生	12.7%	29.8%	14.9%	32.5%
関係法規基礎	9.9%	21.1%	13.4%	34.9%
東洋医学	8.5%	24.6%	6.0%	37.3%
鍼灸治療の主な理論	14.1%	28.1%	10.4%	36.1%
鍼灸治療の対象・目的・方法	16.9%	29.8%	14.9%	36.1%
身体診察（理学検査、四診など）	8.5%	28.1%	14.9%	34.9%
経絡経穴	12.7%	31.6%	9.0%	34.9%

6-3) 鍼灸師としての社会への貢献、責任感、倫理観、自己管理能力に関して

ここでは、「健康や生活を自己管理する力」、「鍼灸師の役割に対する理解」、「鍼灸師になる使命感・責任感・倫理観」、「守秘義務の理解」、「患者の人権を尊重する態度」、「患者や家族に対する思いやり」、「人の意見に耳を傾け共感する態度」などの設問が該当する。いずれの項目においても、「十分付いた」と回答した割合は4年生で高い傾向を示していた。このことから、学生がセミナー、実習、講義等を通じて、学年進行に伴い鍼灸師としての役割や職業的責任、医療人として求められる倫理観や態度について継続的に学び、理解を深めていることがうかがえる。今後も、専門的知識・技術の修得に加え、使命感、責任感、倫理観を備えた鍼灸師の育成に向けた教育を継続していく必要がある。

6-4) 知識の統合、卒業研究における専門領域内の新たな課題を発見・解決する修練

現在、本学科では3年次後期から4年次前期にかけて卒業研究を実施している。ここでは、「物事を分析的・批判的に見る力」、「問題を見つけて解決する力」、「鍼灸の研究への興味と関心」、「鍼灸を研究する意義の理解」、「研究倫理への理解」などの設問が該当する。いずれの項目においても、「十分付いた」を回答した割合は4年生が昨年度に続き最も高かった。この結果は、各学年のセミナーと卒業研究を連携させた段階的な研究教育の成果を反映している可能性がある。具体的には、1年次には教員の研究内容の調査、2年次には日本語

文献の検索、3年次には英語文献の検索を行うなど、学年進行に応じて研究への理解と関心を深める学修を実施している。これらの取り組みを通じて、学生の研究に対する理解や関心が徐々に高まり、その成果が4年次の結果に表れているものと考えられる。今後も、セミナーと卒業研究の連携を図るなどして、鍼灸研究の意義や研究倫理への理解を深め、分析的・批判的思考力および課題解決力の育成に努めていく必要がある。

7.4 年の成長の実感・満足度について

以上の結果から、今回の4年生の回答では、専門的知識・技能の修得に加え、学習習慣、協働性、自己管理能力、倫理観、研究的視点など、卒業後に社会で求められる基礎的能力が着実に身に付いてきていることがうかがえる。これは、本学科における4年間を通じた系統的なカリキュラム、セミナー、実習、卒業研究等を通じた教育支援の取り組みが、一定の成果を上げている可能性を示している。一方で、授業の予習・復習や授業課題のための学修時間については、十分に確保できていない学生も一定数みられた。また、睡眠時間、アルバイト、授業内容の理解、進路や精神面の不安など、学修に影響を及ぼす可能性のある要因についても、引き続き注視していく必要がある。引き続き、学生が自身の成長を実感し、より高い満足度をもって学修に取り組めるよう、授業内容の充実とともに、学修支援、進路支援、生活面・心理面への支援体制を一層充実させていく必要がある。学科全体で学生の状況を共有し、社会に貢献できる鍼灸師の育成に向けた教育支援を継続していきたい。